

ほっとファミリーは養育家庭の愛称です。



**養育家庭(ほっとファミリー)**  
**体験発表集**  
**(平成20年度)**



 **東京都福祉保健局 少年社会対策部**

## 「養育家庭(ほっとファミリー)体験発表集」の発行にあたって

都内には、様々な理由で親と一緒に暮らすことのできない子どもが約3,900人います。このような子どもたちを、実の親にかわり、家庭的な環境の下で育てているのが「里親」です。

都の里親制度は、「養育家庭」と「養子縁組里親」に大きく分かれています。とくに、養子縁組を目的としないで、子どもを家族の一員として迎えていただく里親を「養育家庭」、又は「ほっとファミリー」という愛称で呼び、普及啓発につとめています。

そして、このような子どもの状況とほっとファミリーを理解していただくため、都では各区市町村と協力し、養育家庭(ほっとファミリー)体験発表会を開催しています。

この冊子は、平成20年度に開催された養育家庭(ほっとファミリー)体験発表会において、ほっとファミリーの方々に発表していただいた内容を要約し、冊子にまとめたものです。

初めて子どもに出会ったときのことや交流中の出来事、委託後の子どもの赤ちゃん返りや問題行動などへの対応など、子育てに奮闘している様子が描かれています。また、真実告知や実子との関係など、里子を育てることゆえの悩みについても語られています。

しかし、そういったご苦労の中にも、子どもが少しずつ家庭になじんで心が通じ合っていくのが実感でき、ほっとファミリーをやっていて良かったというものや、子どもから喜びや幸せをもらっているというものなど、ほっとファミリーとして経験した子育ての素晴らしさにも触れています。

より多くの都民の皆様にお読みいただければ幸いです。

平成21年9月

東京都福祉保健局 少子社会対策部 育成支援課長

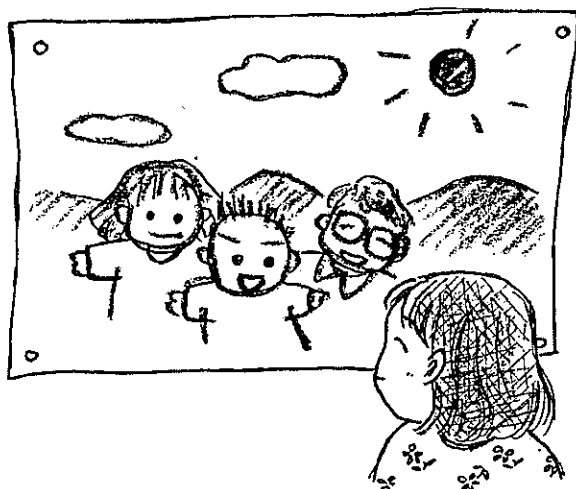
平 倉 秀 夫

## 目 次

1	保育園と里親 .....	2
2	目標をもった子育て .....	4
3	家族記念日のケーキで迎え入れて .....	6
4	地域の人に支えられて .....	8
5	2年間で得られた経験 .....	10
6	3人寄れば強いぞ .....	12
7	人から必要とされる喜び .....	14
8	里親こそが私のライフワーク .....	16
9	今、とても幸せ .....	18
10	お兄ちゃんとマー君 .....	20
11	成長する姿を見る喜び .....	22
12	実母と一緒に育てたMちゃんの思い出 .....	24
13	最初の3ヶ月が肝心 .....	26
14	光をもたらしてくれた子ども .....	28
15	夫と仲良しになった陽気なちびちゃん .....	30
16	縁を感じる里子との長いつきあい .....	32
17	驚いた習慣 .....	34
18	赤ちゃんがやってきた！ .....	36
19	一步踏み出そう .....	38
20	一緒に住んで、ご飯を食べて .....	40
21	子どもと出かける楽しみ .....	42
22	最初が肝心 .....	44
23	ママと呼んでくれた日から .....	46
24	夫婦で仕事・夫婦で子育て .....	48
25	一緒に幸せになろうね！ .....	50
26	離れていても幸せに .....	52

## 養育家庭(ほっとファミリー)

体験発表会に、ようこそ!!



この体験発表集には、26人のほっとファミリー、元里子、実子の方たちの養育体験が赤裸々につづられています。

より多くの方々に、この養育家庭制度を知っていただき、ご理解と共感を得られることを、何よりも願っています。

そのことが、ほっとファミリーの方と、そこで生活する子どもたちを支えることにつながるのです。

## 1 保育園と里親

### 【里母】

私は、里親になってまだ2年と6カ月ぐらいです。私の家族は5人でしたが、長男、次男が結婚して家を出て、長女が大学に合格して、ちょっとほっとしていたのです。私も10年以上託児所のパートで働いていたのですが、この辺で家に入っただけのんびりしようかな、でも趣味ももたないので何をしたいのかわからないなと考えていたところでした。そんなある日、里親のドラマを見たあとで、就学のため同居していた姪が「こういうのしたらどう？」と本当に簡単な気持ちで、パソコンで児童相談所・養育家庭のことを開いてくれたのが始まりです。

そして、里親登録後の研修を受け、1カ月もたないうちにもうすぐ4歳になる女の子の紹介がありました。私のところに来る前に別の里親さんと交流を持ちましたが、心を開かずうまくいかなかったそうです。それで私が託児所で働いていたという経験を買ってくださって、電話が来たのかなと思います。

その子は、やはりすごく人見知りが強くて、私たちが施設に行くと隠れてしまい、すごい顔でにらまれ、何回行ってもだめでした。くじけそうになりましたが、なんとか乗り切ることができ、今度は委託という話になりました。ところが、私は働いているし、年齢もいっているので、うちの場合は保育園に入れないと無理だと家族で決めていました。保育園の申し込みに行ってみると里親といってもまったく優先権はなく、4月に入れるのかどうか分かりませんでした。だから委託を受けていいのかずっと不安でした。ところが、ある日保育園に入れるとの連絡がありました。その時は娘の大学が受かるよりうれしく、これで前に進めるという気持ちになりました。

そして、委託の日、Tちゃんを迎えに行ったら、「ぎゃー」と、それはそれはすごい泣き声なのです。先生から引き離し、泣いて手足をばたつかせて嫌がるTちゃんを落とさないように、抱いて車に乗せるのが精一杯でした。「Tちゃん、ほら、車が見えるよ。モノレールだよ」と言っても、「ポー」と窓の外を見ていました。今度、車から家の中に入れようとする、やはり嫌がるのです。しかたなく、Tちゃんを自転車に乗せて、夜遅くなるまで公園から公園をはしごしました。その日は本当に長い長い1日でした。

次の朝になるといつも「だっこ、だっこ」で、私が何もできないのです。そうだ、おんぶにしよう。長いひもを出しておんぶし、お洗濯や、料理を一緒にしたのです。そうすると背中から顔を出して「何しているの」とだんだん言葉数がふえ心を開いてくれるようになりました。少し慣れてくるとTちゃんは電話にすごく出たがりました。親戚からの電話で話をさせていましたが、ある時私の職場からの電話をTちゃんが勝手にとってしまって、私がいけないと話して電話を取り上げると、すごい勢いで大泣きしたのです。その時まで私は、Tちゃんを泣かせてはいけないというストレスがすごく溜まっていたのでつい「そんなにおばちゃんの言うことを聞いてくれないんなら、もうTちゃんのことを嫌いになっちゃおうよ」と言ってしまったのです。その後、何であんなことをしてしまったのだら

うとすごく後悔の念に駆られたのですが、ある里親の先輩の方から「Aさん、でも自分のお子さんだったらそのくらい言うんじゃないの」と言われ、その一言で、少しほっとしました。

9ヵ月後、Tちゃんには妹さんがいるということを知りました。そして、聞いたときから、「やっぱり私が引き受けるしかないのかな」と、いつも2人がだぶって見えてきたのです。家族は、私の体のことを心配しましたが、最後は、家族もみんな協力して2人を養育しようと覚悟を決めました。その後、妹のMちゃんと交流を進めているうちに、Tちゃんが通っている保育所に空きが出たという話がありました。Tちゃんのときに保育園に入るのが、とても大変だったのでこれを逃してはいけなと、年度途中でしたが、委託を早くしてほしいと児童相談所や乳児院にお願いしました。ところが、交流が少ないので、無理ではないかと言われたのです。私は、Tちゃんに妹がいると知ってから悶々とした日々を過ごし、やっと受け入れられる準備が整ってきたというのに委託は無理と言われてかちんとききました。「私も好き好んで2人も受けるなんて思っていません。ただ、姉妹が一緒に同じ里親で育ててくれればどれだけいいかなと考えたからで、もしうちでだめなら、もっとほかのいい家庭にお願いします」とちょっと怒りぎみに話してしまったのです。そんなことはありましたが、結果的には、姉妹を一緒にさせてあげることができ、ほっとしました。

Tちゃんは、4歳近くなって委託され、私がTちゃんの産みの親ではないことはわかっており、日ごろから「おばちゃん」「おじちゃん」と呼んでもらっています。Tちゃんを自転車に乗せている時です。Tちゃんの運動会のお遊戯で生まれた月ごとに親子で前に出て、スキップしてぐるっと回ってくる場面があり、私が「Tちゃんは5月生まれだからね、間違えないでね」と言ったのです。ところが、Tちゃんがそこで「おばちゃんはTのママのことを知っている？」と聞くのです。「おばちゃんね、Tちゃんのママのことを全然知らないんだ」、「見たこともないの?」「見たこともないんだよ」、「髪の毛は長かった?短かった?」と何回もしつこく聞くのです。それから「あのね、おばちゃん、Tのママね、髪の毛長かったよ。T、ママのおへその穴からママをじっと見ていた」と言うのです。そのときは、自転車がふらつくほど動揺してしまったのですが、ああ、この子はそんなふうにならぬ自分で置かれた立場を消化していつているのだと思いました。

私はこの年で里親を始める気持ちになりました。保育園があるからできるのです。里親をこの年でやるという人には、保育園や学童にどうぞという気持ちで入れてあげてほしいと今強く感じています。



## 2 目標をもった子育て

### 【里母】

私は、里親になって2年目です。私ども家族は夫と娘が3人いますので、子どもに接している時もゆとりをもっていられます。

現在、3歳10カ月のA君を委託されています。A君から見て、私は大ママと呼んでもらっています。夫は大パパで、次女をママと呼んでいます。長女と三女はお姉ちゃんと呼んでいます。次女のことをママと呼ぶのは、今、幼稚園に行っていますが、幼稚園や学校へ行きますと、お友達に「ママは、そんなおばあちゃんなの」なんていわれるのが嫌ですから、次女をママと呼ばせています。そのほか、犬3匹と猫5匹飼っていますので大変にぎやかです。

今、A君は幼稚園の年少組ですが、幼稚園でもお友達とか先生に、とっても人気があります。特に女の子に人気があり、毎日のようにラブレターをもらってきます。「すごいね、たまにはあなたも書いてあげないとね」というと、面倒くさがりやなのか照れているのか、一遍に10枚ぐらいぱっと書いて持って行きます。

この間、幼稚園のお母さん方との集まりがありまして、そのときに長女と三女が出席しましたが、長女が自己紹介のときに、「私はママ1号です」って言ったそうです。そしたら、その次に三女はお姉ちゃんがママ1号なら、「私はママ3号」ということで、「ママ3号です」と言ったそうです。そうしましたら、幼稚園のお母さん方から「いつも幼稚園の行事に参加しているのはママ2号なのね」と言ってもらえました。お母さん方にも里親ということを知ってほしいと思っています。

私は、市の広報紙で里親制度を知りました。3人の娘たちに子育ての経験をさせたいなという思いがありまして、それで娘たちに相談したところ、賛成してくれました。丁度、近くの公民館で養育家庭体験発表会がありましたので、娘たちと参加し、今日のように体験談を聞きました。その時のお話は、女の子を育てられていて、とってもかわいいんですよというお話で、聞いている私たちまでかわいさが身にしみて感じられました。すぐに、家族と相談しまして、里親登録をしました。

間もなくして、当時、2歳3カ月の男の子を紹介していただきました。児童相談所の方々と乳児院で面会しました。すごくかわいかったのですが、最初「だめだめ」と言いながら、ちらっとしか顔を見せてくれなくて残念でした。

翌日から、毎日、会いに行きましたが、初めはとてつもなく慣れにくい子でした。大泣きされたり、「お母さんなんか嫌いだ、あっちへ行け」って言われたりもしました。どうしていいかわからず、泣くA君を抱いて園内で、外に行く車を見せながら、「ほら、パトカーが来たよ、ほら救急車が来たよ、バイクだよ」なんて言いながら遊んでいるうちに、男の子ですから、非常に車に興味があったらしくて、そのまま機嫌が直りました。その後の交流では、A君に会うと、すぐに外へ出ました。いろいろ遊んでから部屋に戻りまして、おもちゃや絵本を見せながら過ごしました。一ヶ月くらい、乳児院で面会し、その後に自宅へ外出してもよいと言われ、我が家へ連れて行き、一緒に食事したりして過ごしました。その後、外出から外泊となり、ようやく

A君は我が家へ来ました。

A君を迎えるとき家族で話し合いをし、1年間の目標を決めました。1つは、おむつを早期にとるということで、トイレでうまくできると家族全員で拍手をしました。拍手が心地良かったんでしょうね。まもなくおむつはとれました。2つ目は、健康を目標にしました。A君は耳鼻科や皮膚科に通院していましたので、夫と相談し、庭に鉄棒を作り、そこにぶらさがったりして体力作りに励みました。夫は柔道をしますのでA君も一緒にやります。3回に1回は夫が負けてあげますので、A君は強くなったつもりでいます。受け身がうまくなりA君の体力もついてきました。我が家では、毎夕食後1時間のウォーキングをしていましたので、A君にも参加してもらいましたが、何と、2歳7ヶ月のA君も歩き通すことができました。おかげでA君は、幼稚園に上がるまで、ほとんど病院に行かず日増しに体力がついてきました。

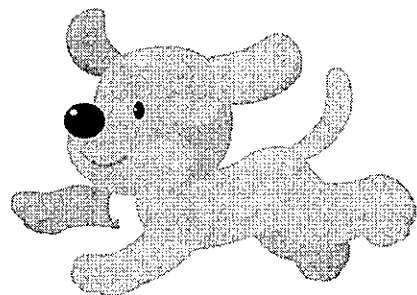
3つ目は、毎日絵本を読んであげようという目標を立てました。昼寝のときなど、絵本を読み聞かせました。1回に2、3冊の絵本を読みますが、その影響かどうかわかりませんが言葉が非常に達者になり、顔の表情も大変豊かなように思います。

A君は家に来た当時は、トイレまでついてくるなど何でも一緒にやりたがりだったので、洗濯物を一緒にたたみましたら、タオルや自分の洋服などは自分でたたむことができるようになりました。最近、タオルを片腕に巻いてきますので、「何で」と聞きますとウルトラマンになったようで、すごく強くなった気持ちでいるみたいです。「自分のことは自分で」という合言葉を使って歯磨きやお風呂での洗髪などをA君自身にやらせて、最後に大人がみています。

A君を育ててみて、すごく感心したのは、2歳10カ月で100ピースのパズルをつくるなど子どもにはすごい能力があることを知りました。最近、トランプに興味があって、神経衰弱をしています。私は全くかないません。私の倍も取ります。子どもというのは、日に日に脳も身体も伸びているということを実感しました。

娘たちを育てていた時、私は仕事と家事に負われていて、子どもたちの顔色もろくに見てあげられなかったと反省しています。子どもはしっかり向き合って育てることの大切さを、A君を通じて今さらながら学んでいます。

これからも、児童相談所や里親の会の皆様にご指導をいただきながら、家族全員でA君を支えていくつもりであります。





### 3 家族記念日のケーキで迎え入れて

【里母】

私は、30年間保育士をしておりました。実子に恵まれず、自分の年齢が50歳ちかくなってきたときに、定年までのあと10年間をこのまま保育士をしながら子どもたちと接していくのがいいのか、それとも養育家庭になって、もっと個人的なだれだれちゃんの手助けをするという形で子どもに接していくのがいいのか、自分の思いがゆれていました。そんな時に体験発表会をお聞きし、思い切って仕事をやめて養育家庭をする決心をしました。

保育士の経験からゼロ歳から5歳の子どもには慣れていたので、就学前のお子さんを希望しました。最初お話があったのは、小学生でしたのでお断りしました。その後、そのお話のお子さんは年長さんということが分かり、主人とはとにかく会ってみようということに話を進めてもらうことにしました。実はそのお話があった日は私の誕生日だったということから何かの縁があったのか、とんとん拍子で進んでいきました。

一番最初の顔合わせに施設に出かけていったとき、近くの公園へ行って、「じゃあ、手をつなごう」と、その子、Rと手をつなぎました。無邪気な印象の子どもでしたが、手をつなぐと汗ばんでいるのです。すごく緊張しているんだな、と思いました。会話は「うん」とかうなづくだけで余りしゃべらなかつたのですが、主人とスーパーボールを投げ合って遊ぶと「きゃきゃっ」とすごくうれしそうな笑い声を立てたのです。

そんないい感じで交流が始まり、最終的にはお話があつてから約6ヶ月後にうちに来ることになりました。ちょうど3月、その日は施設で18歳の子の卒園式があり、玄関のところに施設の全職員と子どもたちが集まってくれて、卒園式とは別にRのために歌を歌ってくれ、送り出してくれました。すると、それまでずっとにこにこしてうちへ来ることを楽しみにしていたのに、その時、つつつと涙をこぼしたのです。私はこの涙を無駄にはいけない、慣れた施設を離れて縁あつてうちに来るRに何かしてあげなければ、という気持ちになりました。家では、家族記念日のケーキを用意していました。その日はロウソクが1本でした。「今日は家族記念日で、毎年1本ずつロウソクが増えていくのだけれど、12本立った時にはあなたは18歳になるのだから、自分の好きなこと、このうちから出て好きなことができるんだよ。」と話すと、その日はずっと緊張気味だったRはすごく納得した様子でした。

名前については、通称名を名乗ってもらうことにしましたが、私たちのことは、最初、おじさん、おばさん、と呼んでいました。でも、小学校に入ったら、お父さん、お母さんと呼べると言っていて、本当にそのとおりにしました。その切り替えは、子どもながらも非常にすごいな、と今でも思っています。

迎え入れてから1年くらいは、私と主人が描いていた子ども像、家族のイメージと、実際の生活の中でのギャップがかなりあって大変でした。保育士の仕事の8時間態勢と家庭の24時間態勢とは時間的精神的拘束が全く違うということ、その差をものすごく感じました。また、家族同士のイベントなどがあると、よその優しそうなお母さんのところへ入

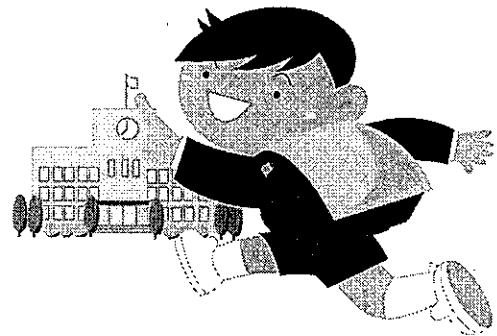
り浸ってしまうということもあり、この時は夫婦で正直かなり落ち込みました。養育家庭1年目は、保育士30年のキャリアもガタガタに崩れた自信喪失の1年間でした。

今は、Rを迎えて2年目に入り、よその優しそうなお母さんのところへ入り浸ってしまうというようなこともなくなりました。先日、養育家庭の集まりがあった時、1家庭ずつ自己紹介する場面で、我が家の順番になったら、向こうのほうで友達と遊んでいたRが走ってやってきて、ちゃんと家族として自己紹介することができました。家族という空気を読めるようになった、と安心しました。

小学校では、PTAや近所の同級生の家庭など多くの人との関係が広がっていきます。うちの一部の方には事情をお話し、理解していただいております。学校の担任の先生に一番最初の個人面談で、彼にはとても困らされているというようなお話をした時、先生は「それは仕方ないわね。子どもなんですから。彼はお母さんが考えているよりずっと頑張っていますよ。」と言ってくださいました。その先生が2年目に持ち上がって、悪いことも言ってくださるようになりました。「最初はどうだったのだけれど、今はこうよ。」と、先生は子どもの様子をずっと見ていて下さっていて、最初から私に直接言わないで見守ってくれていたのだと本当に感謝しています。

経験不足というのでしょうか、ひとりで本を読むことができなかったり、自分の言葉で自分を表現することが苦手だったり、また、施設の日常生活では目にすることがなかったライターやマッチ、主人のひげ剃りとか、小銭とかを触ってみたり隠してみたりというようなこともありました。でも、養育家庭同士の関わりや、地域や学校の関わり、主人の母やお向かいの方、私の姉や近所のダンススタジオの先生に支えられて、相談にのってもらったり、救ってもらったりしています。

NHKのドラマの中で言っていました。「家族というのは、一緒にご飯を食べて、たくさん話をして、そうやって家族をつくっていく。そうすることによって家族はできるんだ。」ものすごく共感しました。また、ドラマの中の児童相談所の職員の方の言葉で、「普通が一番なんですよ。でも普通が一番難しいんです。」というのにも心に残っています。私は、彼をどうやって育てようと考えたときに、本当に普通に育ててほしいと思っています。普通に学校へ行って、普通に恋愛をして、普通に結婚をして、普通に家庭をつくる。それが、私と主人の目標ですが、でもそれが非常に難しいことなんだろうなと実感しているところです。



## 4 地域の人に支えられて

### 【里母】

今年6年生になったMちゃんを迎えて7年になりました。当時5歳の女の子でした。

私たち夫婦が東京都の養育家庭になったのは、結婚して都内に住んでいた時のことです。不妊治療のため大学病院に通院していた際に、掲示板のポスターを見たのがきっかけでした。2年以上の治療で心身ともに疲れ果てて、人生に対し希望が持たなくなっていたときでした。街で見かける親子連れをつい羨ましそうに目で追ってしまったり、野良猫をかわいがり猫に話しかける私の姿に見かねた夫が児童相談所へ足を運び、養育家庭を勧められました。

夫婦で研修会に参加し、我が家に迎える子どものことを考えて、社宅から現在の郊外へ越してきました。3ヶ月後、児童相談所から「このたび、Mちゃんが渡辺さん宅に決まりました」とのうれしい知らせがありました。転居して3カ月の間にいろいろなことがありました。乳がんと診断され、検査の結果、ステージ3と宣告されたのに、次の検査では乳腺炎といわれて、夫とともに喜んで帰宅したときの連絡でした。

Mちゃんは、我が家に来るべきして来たと言われ、夫も私もうれしくて本当に心から感謝しました。今までの気持ちがうそのように晴れて、1日も早くMちゃんに会いたいと思えました。交流を始めましたが想像していた女の子とはちょっと違います。元気で活発なのはよいとしても、何を聞いても「いや、いや」と言うのです。交流期間中の土日には夫と2人で片道3時間かけて会いに行きました。Mちゃんに「きょうはパンダを見に動物園に行こうか」と言うと「いや」。「じゃ、水族館へお魚を見に行こうか」と聞いても「いや」と、施設の先生の背に隠れてしまうのです。門前払いで帰ってきたこともありましたが、先生に促され見送ってくれるようになり、やっと順調な交流が始まりました。

交流中のことです。金曜日にMちゃんを施設に迎えに行きますが、新宿で中央線に乗り換える頃は、「お母さん、お母さん」と甘えてくるのです。逆に施設に帰るときは、新宿から山手線に乗りかえて、施設の駅に近づくと、今度はお母さんからおばさんになるのです。駅から施設までの間、手をつながないときもありました。このMちゃんの変化にとても戸惑い、5歳の子どもなのに、まるで違う人格を示すようで不思議な気持ちでした。

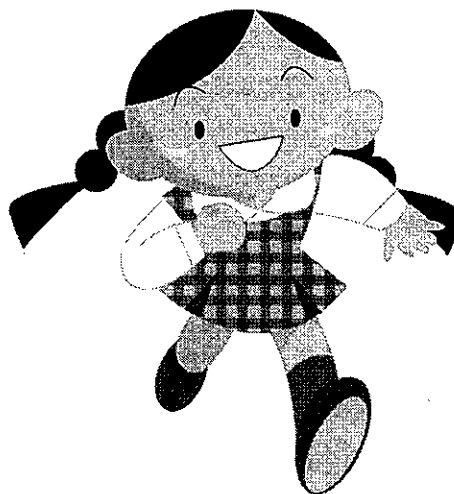
受託して春になり、どこに入園しようかと迷い、Mちゃんと一緒にいろいろ見学に行きましたが、近所の幼稚園の先生が抱っこしてくれ、「Mちゃん、待ってるね」と優しく声をかけていただいたことでMちゃんの心が決まったようで、ここにすると自分で決めました。こうしてMちゃんは、年長の1年間をこの幼稚園でお世話になりました。この幼稚園は、私にとっての子育ての原点となりました。一生忘れない思い出の1年間です。先生は、親切で本当にすばらしい先生でした。

自分で決めたことでしたが、突然5歳の子ども母親になり、心身ともにとても疲れしました。Mちゃんも見知らぬ土地で初めての幼稚園です。入園式のときも、とても緊張していたようです。なれない環境で幼稚園を3日ほど休んでしまいました。担任の先生が我が

家まで来てくれて、「お弁当だけ食べに来てね」と誘っていただけで翌日から登園できるようになり、4月生まれの誕生会も5月にしていただきました。トランポリンの順番が待てずに、前に並んでいる子の背を押してしまうこともありました。家では、秋に夫の実家から栗が届きます。園児の皆さんに食べてもらおうと用意しておく、ゆでた栗の量が2倍になっていました。変に思い栗を切ってみると、ゆで栗の中に生栗が入っていました。Mちゃんに「生栗は食べられないよ」と教えました。ささいなことでも泣くことがありました。ただ、甘えたかったのだと思います。

このように、毎日のようにお試しの行動が続き、心身ともに疲れ果て、妹に電話で相談しました。3人の子育てをしている妹は、私の話を聞くと「カッチャんに問題があるんじゃないの」と言います。納得できず姉にも相談しました。2人を育てた姉も、同じことを言いました。母親の私に問題があるのか、私が悪いのかと真剣に悩みました。それでも毎日生活しなければなりません。だれかに聞いてほしくて養育家庭の支援員をしていた方に勇気を出して電話をかけました。夜の9時頃だったと思います。親切に丁寧に私の話を聞いてくれ、ご自身の体験から適切なアドバイスもいただき、よかったですと思いました。姉妹にもわかってもらえなかった私の苦しみを理解してくれ、まさに地獄のような苦しみの中で救いの手を差し伸べていただき、感謝の気持ちで一杯でした。養育家庭のほっとサロンでも、同じような悩みの方もいらして、苦勞しているのは私だけではないのだと思うと気持ちが楽になりました。

Mちゃんが小学校に入ると、あれほど悩み、苦しんだことがうそのようです。PTA委員会活動でお母さんたちともお友達になりました。私達夫婦は学校や地域の方々を支えられ、今日まで養育家庭を続けてこられました。今後も使命があるならば、命の尽きるまでこの道を全うしてまいります。



## 5 2年間で得られた経験

### 【里母】

私は約6年前に、当時小学1年生の男の子をお預かりしました。とてもかわいい子で、まだ交流の段階で「お母さん」と呼んでくれました。その子は生まれてすぐ小腸を短く切る手術をしたようです。小腸が短いということは、食べてもすぐ出てしまっって栄養にならない。だから体も小さく細く、歯も生え揃ってないし、なんやかやと診察券が7枚もありました。どこかに連れて行ってもまずトイレを探さなければならない、2年生になっても換えのパンツを何枚か持たせる、お風呂に入った後には粗相がしてあるという毎日でした。

病院で相談しましたら、何しろよく噛んで胃でこなさなくてもいい位にしておかなければならないと言われましたが、それを子どもに教えても理解できないばかりか、食べ物にすごい興味を示す上にかなりの早食いだったのです。私たちは食べただけ食べさせるよりゆっくり食べさせることを心がけましたが、とって大変でどう説明したら分かってくれるか、毎日毎日それとの格闘でした。そんな訳で子どもとの関係ができる前にそんな大きな問題が発生していたのです。またその子は施設のグループホームで暮らしていたのですが、大きいお兄ちゃん達からいろいろと知恵をつけられたんだと思いますが、「お前の行く所は18歳までしか居られないんだよ」と言われたというんです。「お母さん、僕はここにずっと居られるの？」と言うもんですから「うちは、居たかったら高校卒業後もずっと居ていいんだよ。お母さんやお父さんがおばあちゃん、おじいちゃんになるまで、ずっと一緒に居ていいんだからね」という話をして納得してもらいました。1年生の3学期の途中から来たので、とりあえず夏のプールの時期までには粗相しなくてすむようにしたいと思い、「この量を一緒に分けて食べようね」と赤ちゃんの離乳食のような感じで育てていったのです。その甲斐あって夏までにはみごとクリアできました。

そのように段々私たちの関係もうまく取れていくかと思ったのですが、3年生になる頃にはギャングエイジよろしく徐々に外に気持ちが向いていきますし、お友達関係もできてくると外で何か食べたり、お友達の家でご馳走になったりすることもあって、家に帰ってきてからまた粗相しているんですね。そういうことの繰り返しで、私としても何とかしようと言う気持ちが空回りしてしまうし、子どもも私を真正面から見なくなってしまいました。学校のお便りなども出さず、保護者会などのプリントも持ってこなかったのが学校の先生から直接連絡いただいたこともありました。

また、3年生の夏休みに新聞配達バイクにぶつかるという事故がありましたが、この時も目の下のアザはどうしたのかと聞く私に答えずそのまま学童に行ってしまいました。学童の先生が子どもに聞いて初めてバイクにぶつかったということを知ったのですが、その時子どもは「お母さんには言わないで」と言っていたそうです。私が今まで心配のあまり細かいことをいろいろ言うものだから、きっと彼にはうっとうしかったのでしょう。それまでは、お風呂と一緒にいった時にその日あったことを話してくれていたのですが、それなりにキャッチはできていたんですが、その事故のあった頃から子どもの行動がだんだん分

からなくなってしまうました。

粗相の件を小児病院で相談したところ、手術して外科的にはよくなって完治することはない、自分で痛さやいやな思いなどを経験しながら自分なりに対応方法を見つけていくしかないと言われました。更に、我が家に来るまでの7年間はそのようなケアをされずにきたので、今更私が「ああしろ、こうしろ」と言ったところでそのとおりでできるものではないとも言われました。心理の先生からは、今はお母さんも子どもも相互に拒否反応が出ているので、毎月合計3回ほど母子への心理面接を実施してみましよう、ということになりました。期待したのですが、子どもは皆からちやほやされることと帰りに外食できることが楽しみようで、思ったような効果も出ないまま、家に帰ってくると元通りと言う始末でした。家に帰れば食べるものは冷蔵庫にいっぱいあるし、息子と娘がおりますのでお菓子もその辺にあるし、いつでも飲食が出来てしまいます。こういう子は食べることで精神的な安定を得るものだという話を聞いていたので、かわいそうに思い制限することも出来ず、とても悩みました。そしてついに、大きいほうをお風呂の中で漏らしてしまうことが秋頃より出てきてしまったのです。私たち夫婦二人だけならいざ知らず、実子達の事もあって限界を感じ、お返しする方向で話を進めざるを得ませんでした。今日、この原稿をまとめながらもまた涙が出てきてしまいます。返してしまっからのほうが辛いんです。

もう3年経ちましたから、今6年生なのですが、同じ年齢の子どもを見ると、今どうしているんだろうと心配になり、施設に戻ってしまったことをとても残酷なことをしたのではないかと、すごく自分を責めてしまいます。

1年間ほど養育家庭のお仲間と会う事を避けていましたが、このたび児相と養育家庭と施設との三者交流会があることを知り、勇気をふるって自分の思いを誰かに伝えてみようと思いました。このまま養育家庭をやめてしまったら、同様な悩みを持った人と話し合うことも、そうならないように工夫する手立てもなくなってしまうと思ったのです。養育家庭仲間が様々な苦勞を共有することで、自分自身も救われるのではないかと考え、三者交流会をとおしてもうちょっとがんばってみようとも思いました。

いま、バザーのお手伝いをするので、支部活動に専念しております。そしていろんな方々の参加を得て活動はとても活発です。新しくお仲間に入ろうと考えてる方もぜひ安心して加わってほしいというのが私の今の気持ちです。

最後に、私が悩んでいる時にお仲間から言われた次の言葉に大変救われ、今までがんばってこられた原動力になりましたのでぜひここでご披露させていただきます。

「あなたのうちに来た2年間は決して無駄じゃなかったんだよ。」



## 6 3人寄れば強いぞ

【里母】

我が家の家族構成は、知的障害児施設職員をしている夫と、仕切りたがり屋で天真爛漫の小学4年の長男、そして冷静沈着、しっかり者の小学1年の次男で、ともに野球少年で地元のチームにコーチの父と参加しています。母である私は結婚前後に保育士の仕事に就いており、夫とは子ども好き、アウトドア好きの共通点があり結婚しました。里親になろうと決意したのは、主人との共通の価値観を持って歩いていきたいという願いと、母親と保育士の両方の目で他人の子を育ててみたい、そして、その中から実子が何か大切なものをつかんでくれたらとの思いがあったからです。

そんな我が家に12月の暮れ、登録からすぐにT君の話がありました。5歳の男の子ということで少し迷いもありましたが、でも男の子のママだし、保育士の経験からも男の子の扱いは得意との自信もあったので、にぎやかな我が家になることを期待し、受けることにしました。初めての対面、色白で穏やかな雰囲気を持ったT君は声をかけると恥ずかしそうに照れながら、主人の胸に抱かれ髭をスリスリされ、「いたーい」と、けらけら笑っていました。次は実子とT君の子ども同士の間わりを見ようということで実子を施設に連れて行ったのですが、待ち構えていたT君はすぐにお出かけしたいとの希望。そのまま近くの公園に行きました。「お兄ちゃん、お母さん、お父さん」と呼び、長男の後を追いかけて走り回る無邪気な姿が見られました。純粹でおっとりしたT君に実子二人も「うちの仲間に入れてあげようよ」と次に会うのが楽しみの様子でした。3回目の交流は祖父母、従弟たちと大勢で訪問しました。叔父たちに面白おかしく遊んでもらい、満面の笑顔で興奮ぎみ。いろいろな人に声をかけてもらい、楽しい1日となったようです。実子二人の活発な言動に比べおっとりしたT君は「かわいい」の印象で週末だけでなく平日の休みのときも二人でお出かけするなど、まめに交流してきました。

いよいよT君が我が家にやって来ました。最初の特別扱いも長く続くはずありません。土日は兄たちとの野球、普段は家の前で近所の子もたちと遊び、私は仕事と家事で忙しい。この日常につまらなさを感じ、「あっちに行きたい。ここへ行きたい」と、要求するようになったのです。またT君は度々一人の世界に入り、話しかけても気づかないほどマイペース。でも楽しかったりするとテンションがあがり、人が変わってしまうのです。3歳までネグレクトの家庭で育ち、声かけ不足、経験不足からくるのか、物の名前を知らない、人と上手く関われない。その不足分を取り戻すように毎日毎日、「どうして」「何で」と、四六時中私にあびせかけます。次第にしつこくなると同時に私について回り、関わりの手さから「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と言われていた兄たちからも「うるせー」と相手にされず、独り言も含め、しゃべり続けるT君。声も大きいので雑音のうるささに耳障りを初めて知りました。

それでも優しく穏やかに頑張っていた私ですが早く自分のペースを取り戻さないとストレスで爆発してしまうと、必死にこらえていたのです。悪い事をしているわけでないのに、怒ってはいけないと思い、保育士の顔を演じていたのです。T君は自分を大きく見せよう

との気持ちの表れか、嘘をつくようになりました。「知っている」は毎日のことで、兄たちも「嘘つくな」と怒鳴ることも多くなりました。その嘘もいろいろ含まれているので兄たちにそこを理解させるのが難しかったのです。とにかく、つらいことばかりで我が家にやってきたT君に、世の中の常識やマナー、人間関係が困らない程度に少しでも教えようと、身振り手振りで話しても最後は「わからない」の一言。同じことを何度伝えても忘れてしまう。T君のせいではないのに、打っても響かないこの子に一生懸命語りかける私、声かけの量が、圧倒的に実子より多くなり、「Tばかり優しくして」の反発も出てきました。身辺整理が良くできる実子と比べてしまい、これもまた反発の種。実子と里子の溝がどんどん広がります。ただ一人ががんばって空回りしているようで虚しくなりました。私に限界が来てしまい、首から上が固まってしまい、頭が重くなり、それを体で支えられず、歩くのもやっと、ストレスから耳も聞えづらくなりました。全体の先生より、気持ちと姿勢を上昇させるようアドバイスをもらい、それで何か吹っ切れるのを感じました。

その日、いつものように兄弟喧嘩をしている実子に「てめーら、いい加減にしろ、出て行け」と一喝。二人は大泣きしたものの案外あっさりと謝りにきたところを見ると、私を試していたんだなと思います。その瞬間、今までの元気で明るく怒らせると怖いお母さんに戻ったのです。そう、これが私らしい、もっと遠慮せずに感情を出していけばいい、何で気を使っているのだろう、私が3人を引張って行かなきゃ。その強さを忘れていたのです。私の変身振りは子どもたちの行動にも大きく影響するのです。嘘のつき方も上手で「わからない」ととぼけるT君に始めは受け入れ、それでも変わらない態度に「嘘をつくなら外へ出なさい」と庭へ連れ出し、泣き叫び、まさに感情と感情のぶつかりあいです。

結果、嘘はつかなくなり、今では「Tは悪い事をして外に出されたことがあるんだよね」と自慢げに話します。Tの育ちや成長、発達ばかりに目を取られ、感情に触れずに接してきたことは良くないと思いました。自分のことを一人の大人が最初から最後まで真剣に考えてくれる、兄たちみたいに外に出される。Tにとって必要なことはこういうことだったと気づきました。私自身、怖いばかりではだめなので、子どもたちと一緒に汗だくになってプロレスごっこを楽しみ、じゃれあい、笑いあい、いけないことをしたときは毅然とした態度で揺るがない。

里親をしていなかったら、もう手が離れたと思っていたら子育て、T君がきたことによって実子たちの心の動きも読み取るようになり、良かったと思います。年の近い男子3人、些細なことでもライバル心の塊です。お互いに刺激しあえたら、それはとても良い方向に流れていきます。3人いれば盛り上がる、野球だってキャンプだって楽しいのです。

今度、T君は小学生です。3人が同じ小学校ということで助け合いながら育ててくれたらいいなと思います。今からとても楽しみです。



## 7 人から必要とされる喜び

【里母】

我家は養育家庭を始めて4年になります。現在小学5年の元気で、可愛い女の子を育てています。私たちが里親になることを考えはじめたのは7年ほど前でした。夫婦共働きで週末は夫婦でテニスをし、それなりに人生を楽しんでいました。仕事も趣味も充実していましたが、やはりどこか満たされない気持ちがありました。話合いの結果、子どものいない人生というのは寂しいねという結論に達し、里親になるということを考え始めました。慎重な主人は「子育てはしたいが、そんなに簡単に家族になれるのだろうか」と少し心配そうでした。想像して心配するより、実際に子ども達に接してみれば、よくわかると思い、同時にフレンドホームも登録しました。

すぐにフレンドホームとして幼稚園の年長さんのAちゃんを紹介いただきました。『運動が大好きな元気な女の子です』と伺っただけで、『我家にぴったりなタイプじゃない！？』と主人と大喜びしました。一方、6歳と聞いて私達が愛着関係を築けるのか少し心配でした。Aは人懐っこい子だったので、ほっとしたのですが、学園から外へ出ると固まってしまうのです。学園から抱っこして近くの公園に連れて行っても、他の子を怖がり帰りたいと、頑なに拒みます。Aにせがまれて連れて行ったマクドナルドも店内を怖がり、車内で食べました。そんなおっかなびっくりの交流でしたが、会いに行くと笑って歓迎してくれる日が続きました。

しかし、学園の運動会の日、突然私達を避けるんです。学園の友達にずるいと言われたことも理由だったようです。その次の回は学園の中でしか交流はできず、心配になり学園の職員に相談をすると「大丈夫ですよ。避けてるように見えますが、こちらを意識していますから」と言われて少し安心しました。私達はAの遊び慣れた公園から序々に交流の場所を広げました。交流が進んでもAはさまざまなものを怖がりました。初めての場所、お泊り、一緒にお風呂に入ること、バスや電車にのること、部屋に一人きりでいることはもちろん二人きりになることさえ、怖がりました。Aの様子を見ながら、少しずつ交流を深めていきました。

3ヶ月経ち、お泊りできるようになった時、寝るときも寂しいだろうから、添い寝してあげようとして近づくと拒否され、しかし一人では眠れず、妙な距離感と緊張感がありました。長く泊まれるようになって、主人が帰ってくるまで間がもたず、駅やファミレスで主人の帰りをAと二人で待った日もありました。少しの沈黙や静けさも怖いというのです。また、室内遊びより体を動かすことが大好きな子でしたが、公園やプールにつれて行っても、1年位は、はじめての場所は目が三角になり、固まってしまいました。出かけるたびに、はらはらどきどきの連続でした。今では、お出かけが好きになり、当時のことを考えると夢のようです。

1年経った頃、Aは決意したように、「私、決めた。学園やめる！このお家にずっといる」と突然言いました。夏休みを我家ですごした後に学園で、「夜寂しくて、お父さんと

お母さんに会いたいよって布団の中で誰にも聞かれないように泣いてたんだよ」とAから聞き、涙がでました。彼女の願いが通じたのか、数ヵ月後に児童相談所から養育家庭としてAをお願いできませんかと正式にお話をいただき、1年生の3学期から我家で生活を始めました。一緒に暮らせるようになったことが嬉しく、成長を見守れることに涙が出そうになりました。でも、しっかりと育て空白の時間を取り戻そうと、肩に力が入りすぎていたかもしれません。待ちに待っていた日々でしたが、急に1年生の親になり、私達も本人も大変な部分もありました。1年半交流しても、家族としての関係や生活は定着しておらず、毎日が嵐のようでした。勉強は教えてとせがむわりにはすぐに「わからないー」と宿題を破ってしまい、わがままはどれくらい通るのか、テレビやおやつの量では激しい綱引きがありました。特に食べ物への執着は強く、気に入らないとかんしゃくをおこし座り込むこともありました。反面、学校へ行く前はべたべたと私から離れられず、冷たい視線でみられたこともありました。救いだっただのは、仲良しのKちゃんファミリーが、Aを理解してくださり、「今まで大変な人生だったのだから、大目にみてあげようよ」と、静かに暖かく見守ってくれたことでした。

そうやって、ひとつひとつ不安な気持ちや怒り等を聞き、ひたすら抱っこをし、赤ちゃんがえりに一生懸命つきあい、2年程すぎたころ、家族としての心の距離も急速に縮まり、意欲も出て、人間関係も徐々に良くなり、満面の笑みをみせてくれることが増えました。そんな笑顔を見ると本当に可愛いなあと思います。また、その頃に迎えた私の誕生日には、Aが背中に隠していたスケッチブックをハッピーバースデイを歌いながら「ママ、お誕生日おめでとう！」と渡してくれました。主人とAの手作りのアルバムでした。「大暴れしても、抱っこしてくれてありがとう！ママ愛してるよ！」とAが言ってくれ、初めて3人で嬉し泣きをしました。ちゃんと彼女の心に向き合った私達をみていてくれたのです。私達の方が、ありがとうの気持ちでいっぱいでした。

5年生の今も、甘えん坊で毎晩添い寝が必要で、手がかかりますが、心から愛しい子です。里親になったことを後悔したことはありません。Aも『パパとママに会えて、この家に来て本当によかった。毎日普通の家から学校に通えて本当に嬉しい。これが夢だったらショック』、『小さいころ目がさめたら、いつのまにか学園にいて、自分にはパパもママもいなくてとても心細かった』と今だに言います。『ママとパパがそばにいてくれるから私は毎日とっても幸せだ』という言葉はたまりません。私達家族の生活はとても充実しています。人間は自分だけのために生きているよりも、人から必要とされることが人生の喜びとなることを実感しています。

Aのように長期間、実家庭へ帰るのが難しい子には、温かい家庭で生活できるよう、心から願っています。Aも『学園の友達にも新しいパパとママできるといいのになあ…』と時々つぶやきます。それには多くの家庭にほっとファミリーの登録していただくこと、そして、温かい地域の方々の応援が欠かせません。どうぞ皆様、この子達に普通の幸せを実感させてやって下さい。

## 8 里親こそが私のライフワーク

【里母】

私は、市報に里親募集の記事が載っているのを見て、子どもに恵まれなかった私はすぐに里親の登録をしました。今までに6人の女の子さんとの出会いがありました。

1番最初に、我が家に来たお子さんは、5歳で施設から参りました。このお子さんは、お母さんの虐待を受けたお子さんでした。我が家に来ての生活は、夫の言うこと、話すことはほんとに喜んで聞くんですが、お母さんがわりの私の言うことは聞く耳もたずという感じで、頑として言うことを聞きませんでした。それがずっと続きました。

高校生になって、卒業間近になりましたときに、自分は看護師さんになりたいと言い病院付属の看護学校に入り、我が家からの自立になりました。

2人目のお子さんは、上の子が小学校4年生のときに乳児院から3歳で参りました。このお子さんは、来て早々に私に「お母さんができてとってもうれしい」ということを言ってくれて、私はほんとに我が子ができたという感じで、とってもうれしかったことを覚えています。

このお子さんが、家ではとってもいい子だったんですが、外でいろいろと問題を起こし、家にはいられないような状況をつくってしまいました。自分から中学校2年生になるときに家を出たい、施設でも良いから行かせてほしいということをお願いしました。私は、本当に自分の子どものように可愛い、可愛いと育ててきましたから、その時はショックで言葉がでませんでした。しかし、やむを得ず我が家から出しました。

その次のお子さんは、何年かして、中学校1年生の子どもで児相から朝電話をいただき、緊急ということだったと思いますが、その日の午後に参りました。我が家での生活はほとんど会話がなくて、話しかけても「別に」と言うし、「どうなの」と聞くと「普通」という感じでした。思春期の難しい年ごろですし、これはとと思って覚悟はしていたつもりでしたが、ちょっと大変でした。頭のいいお子さんで都立高校に推薦で入学が決まりまして、私どももほっとしておりましたが、本人もちょっと油断したんでしょうか、男の大学生から電話がかかってきまして、朝帰りが始まりました。これでは無理、限界ということで、やむを得ずお返しさせていただきました。

それから、何年かたちまして、今度は高校1年生のお子さんが、お電話いただきましてから、二、三日ぐらいして参りました。それから、半年ぐらいして中学校2年生のお子さんが来ました。2人になって、とてもにぎやかになったなと思っておりましたら、またいつの間にか夫婦2人だけの生活になっていました。

ちょっと寂しいね、もう少し長くいてくれるお子さんが来ないかしらということで、児相にお願いしましたら、今度は小学校6年生の私どもにとっては孫のような可愛いお子さんが来てくれました。今はその子を中心に3人で楽しく生活しています。

長いこと、どうして里親をやっているかですが、夫婦2人とも健康であったこと、そして夫が私以上に子どもが大好きで、常に協力的であったことです。それと、子どもに恵ま

れなかった私は、里親こそが私のライフワークというふうに勝手に決めて、どんなことがあってもあきらめないをモットーにしてやってきました。

いろいろなお子さんと出会いがあって、苦しいことつらいこともいろいろありましたが、今になって思うことは、お子さんたちが来てくれて、夫婦2人だけだったら寂しい人生だったという思いがします。今になって思いますと、いろいろなことがあって、あの子はああだったね、こうだったねという思い出話も、笑って話せるというのが、楽しく思い出せる、そういう状況になっています。

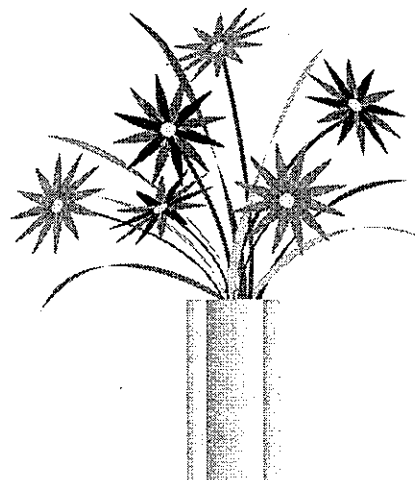
そして、もしできるならお子様に恵まれなかった方、子育ての終わった方、そして子育て中でも余力のある方、ぜひ里親さんを引き受けていただきたいと思います。

実の親に受け入れてもらえなかった子どもたち、その子どもたちに少しでもいいですから、温かい心と温かい手を差し伸べていただいて、私ども里親のお仲間になっていただけたら、こんなにうれしいことはないと思います。

つい、二、三日前にもバザーがありまして、そのバザーの作品をつくるのも、皆さん集まってわいわいがやがや手づくりを楽しんで、その間にいろいろな子育ての愚痴やら、こうだ、ああだと話をしながら、里親同士で作品づくりを楽しんだりしています。ぜひ、お仲間になっていただけたらうれしいです。

里親制度があったからこそ、私たち夫婦は寂しい思いもせずにやってこられました。ほんとに、この制度には感謝、感謝で、今はおります。

今は、6年生の子がおりますけれども、その子は読書が大好きで勉強をそっちのけで本を読んでいます。時々夫のほうがちよっとうるさくて、たまには勉強しろって言うんですが、子どもには、それはあなたがかわいいからだよということは常に言っています。ただ、私は図書館の司書という資格も持っている立場上、読書は子どもには大事だからということで、本を読ませてあげたいという気持ちでおります。簡単ですが、体験談を話させていただきました。



## 9 今、とても幸せ

### 【里母】

今私は、小学4年生の女の子をお預かりしていますが、なぜ養育家庭を始めたのかということからお話したいと思います。

私が高校3年のとき、職業選択に悩んだ末、「子どもは未来をつくる、未来の社会そのものなんだから、子どもが大事にされない社会は滅び行く社会だ」との思いから児童福祉の仕事を目指ようになりました。しかし、その後の人生は全く予定外に展開し、30代には2人の息子を抱え、会計事務所勤務でした。子どもを幸せにする仕事があったはずなのになぜ、と思い悩んでいたとき、資格がなくても里親だったらできることに気づき、いつかは里親と心に決め、息子の成長を待つうちに児童虐待が目につくようになります。私の思いは絶対里親、早く、早くと募っていきました。

そして高校卒業後29年にしてやっと、里親認定され、数カ月後、紹介されたのが今の娘です。娘は、2歳9カ月から施設で生活をしています。身寄りはなく、「おうちが欲しい」、「パパとママが欲しい」と、訴え続けていたという子です。交流期間は「ここがあなたのおうちになるんだよ、これからは、私たちがずっと一緒だよ」という気持ちが伝わるように心がけましたが、彼女も甘えるのが大変上手でした。

お風呂では「洗って」「ふいて」、着替えは「脱がせて」「着せて」、移動のときは「抱っこ」、「おんぶ」。これがまた、長い手足でコアラのように私の体にぴったりとへばりつきます。その2歳児くらいの要求を9歳の長く大きい手足から出されるさまが、こんなに大きくなったのに、本当ならもっとすっぽりと抱ける、もっと小さな手足の時に甘えるはずだったのに、と思うとたまらなく切なく、彼女に涙を見せないようにするのは大変でした。

交流は、駆け足で進められ、3月、彼女が7年間暮らした学園とお別れの日、園長先生に「この子は帰るところのない子です。見た目で外国人とわかり、名前もカタカナなのに日本語しか話せず、日本で生きていく子です。どうか日本の普通の女性としての文化・習慣を身につけさせ、18歳以後もよりどころとなってあげてほしい。」と言われました。こうして4月、我が家の地元の小学校の4年生になりました。

我が家の誕生会は、本人が前年の反省や当年の抱負を家族に宣言し、「あなたが生まれた」ことを皆で喜び合う会なのですが、偶然にも2人の息子と新しい娘は、3人とも4月生まれで、家族のお祝いが続く4月でした。そして新しい家族を記念しての写真撮影をして、5月にはその写真で挨拶状も作りました。また、5月には運動会もあり、娘はリレーの選手になったので、私の両親や弟家族、息子たちの彼女と大勢が集まり、皆で応援し、娘も大喜びでした。これらのことは、「おうちがほしい」と言っていた娘が、家族を感じ、その家族につながる大きな家族である親戚を感じ、さらにその多くのつながりの中に自分も加わったのだと実感してくれることを願ってのことでした。

初めての出会いから10ヶ月、娘には気が強くあやまるのが下手とか、都合が悪くなる

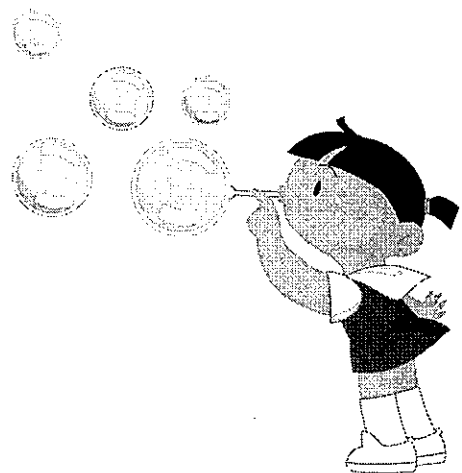
と自動的にふさがれてしまう耳と自動的に発生する騒音装置付きの口を持っているとか、噛むとか、叩くとか、汚い言葉とか、食べ物の好き嫌いとか、算数が苦手であるとか、作文が書けない、本を読めないなどさまざまな課題あります。

自分の子育て中には気づきませんでした。0歳からの子育てというのは、自分の好きなもの、考え方、やり方に染めていくことだったのだとしみじみ思います。その子の個性が出てきても初期の段階からですから、お互いに染め合って、落ち着いていったのだと思います。ところが感情面の発達は大人と同じといわれる10歳になった娘が、私とは違う習慣を身につけて、私と向き合ったわけですから私が嫌がることを学園で教わったと普通にやります。中でも気になるのは、食べ物を大事にしないことです。そして言葉使いが汚いこと、噛んだり、叩いたりをなかなかやめないことです。

「くそ婆」、「鬼婆」と、息子たちにも言われたこともない言葉を、かわいい顔をした娘に言われ、がっかりします。

担任の先生に、「大人の生き方が問われますね」と言われましたが、まさしくそのとおりで、私の生き方が問われます。これは、とても厳しいことです。しかし、厳しい中で、今とても幸せなのです。抱きしめて髪をかき上げるとき、湯船で私の胸元に顔をうづめているとき、仕事から帰ると玄関に飛んできてまさしく飛びつかれるとき、「ほら、来たときよりこんなに大きくなったよ」と、鏡の前に2人で並んでいるとき等、大変なことの何倍もの喜びがあり、楽しく充実しています。

養育家庭になって、人生の後半での再度の子育ては、夫婦の絆が深まり、息子たちや両親との絆も深まります。さらには毎日がいきいきと輝きだします。皆様に養育家庭っていいなと思っていただけましたら大変うれしく思います。



## 10 お兄ちゃんとマー君

【里母】

里子のマー君がうちに来て7カ月になります。まだまだ新米の里親なんですけれども、この短い期間にあったことをお話しさせていただきます。

うちの家族は、夫、私、小学校2年生の長男とマー君で4人になります。その長男が「弟が欲しい」と言い出したことから、養育家庭に登録しようと思いました。

マー君との出会いは、1年程前の去年の11月でした。まだ当時1歳7カ月で、乳児院に面会に行きました。マー君はとても小さく赤ちゃんぽい、かわいいなという第一印象でした。

面会を重ね、お正月過ぎから外泊をするようになって、3月の末、マー君の誕生日に正式委託になりました。交流を始める時に私たち夫婦が一番心配したのは、マー君とお兄ちゃんとの関わりでした。それは今も一番の懸案ではあるんですけれども、お兄ちゃんとの関係がもしうまくいなくて、私たちの家族関係に無理が生じるようなら、申し訳ないけれど里子をお返ししよう、ということをお話し合ってからマー君との交流を始めました。

面会を始めると、案の定お兄ちゃんは揺れに揺れてくれまして、ますます甘えん坊になりました。マー君を入れて3人で一緒に遊ぶんですが「お母さん見て」「お母さん遊んで」と、お兄ちゃんがまとわりついてくるんです。いやー、困ったなと思って「どうしたの」と聞くと「だって、さびしいんだもん」と言うんです。

1月の中頃、お正月外泊が終わり施設に戻った後の面会日のことです。その日は、マー君がお兄ちゃんとの遊びに乗り気ではなかったんです。3人で遊び始めるとお兄ちゃんは疎外感を感じてすね始め「お母さん抱っこして」と来たんです。しょうがないと思って抱っこしました。そしたら今度はマー君が、これはやばいと思ったらしくトコトコと走ってきて「抱っこして」と言うので、こっちに抱っこ。距離が縮まりちょっとほぐれるかなと思ったら、マー君がお兄ちゃんをぐいーっと押しちゃったんです。要らないというんです。お兄ちゃんはずねていたので、ええっという感じで私の後ろに行き「ひとりがいいんだ」「3人にいるならお父さんと3人がいい」と言い出しましたので、今日はまずいなと思って面会を中止しました。

施設からの帰り道、かみくだいてお話ししながら帰ったんですけど、彼はまだ自分の想いを説明できないんです。私の問いかけにも「うん、うん」とか「わかんない」という感じでしか返ってこないのです。私から一方的にわかるように、いろいろな気持ちも含めて話しました。

そうしたら、何かが彼の心の中にすんと落ちたらしくて、途中から表情がすごく明るくなり、その日を境に揺れの幅が大分小さくなっていきました。このことがあって、親としては、マー君が正式にうちに来る前にお兄ちゃんとの親子関係に「保険」をかけておこうと考えました。

夫は「少しでも時間がとれたら、とにかくお兄ちゃん優先に遊ぶ」と宣言し、実行してくれました。私も、それとは別に、お兄ちゃんとの関係を作ろうと、3つのことを実行しました。

1つ目は、今まで余り二人で遠くにお出かけしたことがなかったので、ちょっと遠出のお出かけを何回かしました。これはどのくらい思い出になってくれるかわかりません。

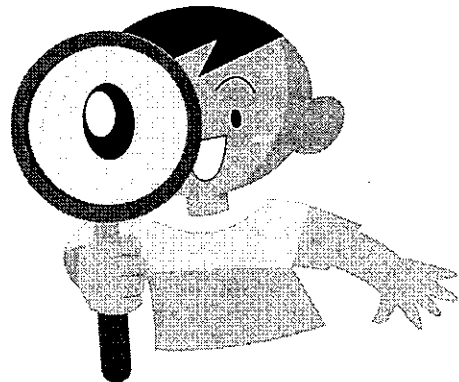
2つ目が、まだ学習机を買っていなかったの、手づくりしようと思いました。たまたま木工の先生が近くにいて知り合いになっていたの、ほぼ私がつくったんですが、仕上げはお兄ちゃんと一緒にやりました。これはほぼ丸一日ぐらいかけて一緒に作業したので、結構満足いく時間が持てたかなと思います。学習机はかなり大きいものなので、いつも目にふれるところにありますし、手で触れるわけです。これから先何か親子関係で危機的な状況になったとしても、目にふれてちょっと考えてくれるかな、あのときお母さんと一緒につくったことが手で触ってわかるかなというふうに、私としては思っているんですが、どうでしょうか。

3つ目は、夜のお茶会の時間をお兄ちゃんと持つようにしました。一対一で向き合う時間をちゃんととりたかったんです。それが夜しかないの、マー君が寝てから一緒にお茶を飲み、お菓子を食べてお話をしたりテレビを見たりという時間を30分ぐらいとりました。学校に行くのが遅刻ぎりぎりになりましたが、それはさておき、家族の気持ちの安定につながったかなと思います。お兄ちゃんもその時間を楽しみにしてくれましたし、私もお兄ちゃんをないがしろにしていないという安心感がありました。これは2月頃から始めて夏休み前ぐらいまでずっと続けました。2学期からはとっていません。ちょっと落ち着いたかなと思っています。

学校でも、最初はけんかしたりすぐ泣いたりということがあったらしいですが、6月半ばぐらいから落ち着いてきました、と先生からお話があったときは、正直言ってほっとしました。

マー君は今、お兄ちゃんのまねをとことんしています。すごく理解力のある子で、よく聞きよく見ていて、何でもまねるので、お兄ちゃんは時々ぶつんと切れて「やめろー」と言ってけんかになりますが、端から見ている分にはとてもおもしろい状況です。お兄ちゃんにしてみればまだマー君との関係のとり方がちょっとわからない。その辺は諭しながら、この二人の関係は今後見守っていくしかないかなと思っています。私は、本気でけんかができるようになったところで「とりあえずよし」としておこうかなと思っています。

子どもたちの関わりの変化とか、私と夫がこれから子どもたちとどう成長していけるかというのが、怖い反面とても楽しみです。仲間に助けられ、家族の大切さもすごくしみじみわかったの、一人でも多くの仲間と一緒に子育てしていけたらとてもうれしいな、と思います。





## 11 成長する姿を見る喜び

【里母】

幼い時から施設で育った、現在中2の男の子Yの里親となって丸3年になります。ちょうど1年前の体験発表で、そのときに書いた物を読んでもみると、当時次々と問題が起き、その対応に追われていたのですが、この1年のYの成長ぶりというものが見えておもしろいなと思いました。

まず我が家の紹介を簡単にさせていただきますと、実子は既に結婚して別に暮らしています。よく盲導犬になるようなラブラドルレトリバーという犬を2匹と、それから里子が来てからもう一匹ふえたので、今は人間が3人、犬が3匹という家族構成です。

私たち夫婦は、お互いに児童養護施設などで働いた経験から里親ということに関心があり、以前からやってみたくて思っていました。

小学5年の暮れにYが委託され、Yとの生活が始まると、細かいことですがいろいろな問題が起こってきました。Yは、すごく明るく誰とでもすぐに友達になれ、優しくて動物好きでない子なのですが、面倒くさがりやで、身の回りのことを自分で管理することができなくて物をなくす、壊す、忘れ物が非常に多いです。また、1人で留守番などをさせるとたががはずれるということがあります。だから、1人で家にいてもやっちゃいけないことを口を酸っぱくして言っているのですが、それを守れるようになるには相当時間がかかるだろうと思っています。

うちに来たばかりのころは、何かちょっと注意するとだんまりをきめこんで、全く口をきかなくなり、こちらもカッとなってお互いに口をきかないこともありました。ある日の朝、宿題を教えていると、ふてくされてストライキを起こしたので、ついこちらも頭にきてしまい「そんなに勉強が嫌いなら学校に行かなくていいよ」と言ったら、もう梃子でも動かなくなってしまいました。今度はこちらが慌ててしまって11時半が過ぎたころ、「給食の時間なんだけど給食食べに行かない」と言ったら、「うん」と言って出かけたのでホッとした覚えがあります。

結構強情っ張りなところがあるなと思って、こういうやり方はだめだと痛感したわけです。そんなふうには、お互いに押したり引いたりしながらだんだん距離感がつかめてきました。私が児童相談所の方からたびたび言われていたことは、「大目に見てあげて」ということでした。ただ、私としても家庭にはその家庭のルールというものがあるので、それは守ってもらわないと困ることがあるので、Yにはそれが厳しく感じることもあったのかなと思います。

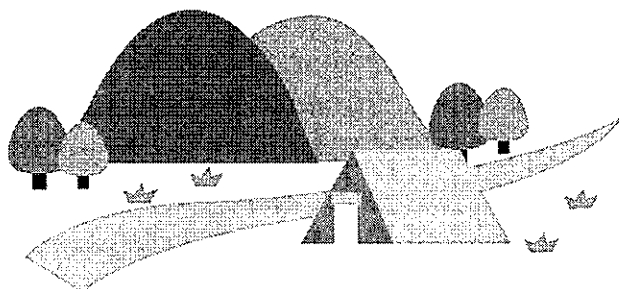
中学1年の2学期に入ると友達をいじめているということで、何度か学校から呼び出しがありました。相手の親御さんのところに謝りに行くこともあり、私もちょっといい加減にしてという感じでした。そういうなかで、今度は部活で問題があると学校から呼び出しを受けました。夏休み中はほとんど毎日部活があったのですが、どうやら部活がおもしろくなくなってきたらしくて、無断でさぼったり、行っても友達の前を邪魔をしていたそうです。担任から部活を続けるかどうかという判断を迫られたのです。私は、Yは部活の友達も多いし、やめたらなおのこと生活が乱れるんじゃないかなと思って、Yに続けるように言いました。Yもそれに納得し、願

問の先生を呼んで、Yが「これから真面目にやります、ごめんなさい」と謝ったとき、「私は真面目にやる生徒は大切に、それは当然だろう。君はふざけてほかの生徒の邪魔ばかりしているからやめてもらっていいんだ。」と先生は冷たく突き放すような言い方をしたのです。私は、そのことにちょっとかちんときまして、部活の顧問という前に1人の教師でしょう、それが教師の言う言葉かと。やる気のなくなった生徒をそんなふうに取り捨てるなんて教師として失格だというふうに思ったのです。そういう環境の中で、勉強、勉強、部活、部活というふういきゅうきゅうとした毎日を過ごしているのだなと心底Yに同情しました。これで家でもきゅうきゅうにしたらかわいそうなんだということで、そのとき児童相談所の方が言っていた「大目に見てあげて」という言葉がほんとはよくわかりました。あの子にしてみれば、普通の家庭で育った子より根っここのところで幼いというか、育ち切れていない部分があるので、ほかの子どもと同一で比べられたらかわいそうなのです。私もそのことは児童相談所や、前の施設の職員から教えていただいていたのですが、学校の先生はそこまで気を使ってくれないのです。本当は言ってはいけないのかもしれないのですが、Yに「卓球強くなって顧問の先生を見返してやれ」と言ったのです。そして、今後無断で部活をさぼらない、友達を邪魔をしないという2つの約束をさせました。その後、Yはずっと約束を守って最近腕も上がって、先日は市民大会の個人戦で銀メダルを取るまでになりました。

去年まで抱えていた問題としては、物を大切にしないということがありました。文房具、小学校のときのランドセル、自転車の鍵などをすぐに壊し、部屋の壁紙をはがし、ベッドをコンパスで傷つけるということが頻繁にありました。ほとんど困り果てて施設の先生に相談したとき、幼児期に愛情を十分に受けてないと、人や物を大切にできないという愛着障害というのがあると教えていただきました。

それが、そういえばこここのところ大分少なくなったことに気がついたのです。愛着障害というのがそう簡単に治ったとは思わないのですが、大分改善されているのかなと思います。それは、きっと部活の事件の後、私がYに対して本当の意味で寄り添うことができるようになったからかもしれません。

最近Yはよく、よその人から褒められます。里親会のキャンプのときには、年下の子どもの面倒をよくみます。同じ里親から上手に遊んでくれると感謝されます。そのようなわけで、里親仲間からは希望の星と持ち上げられています。少しずつではありますけれども、Yが成長していく姿を見るのが私の喜びになっていまして、また自分も成長できているのかなと思います。



## 12 実母と一緒に育てたMちゃんの思い出

【里母】

私は、幼い頃から幼稚園の先生になるのが夢でした。そのための専門学校在学中に児童養護施設で実習し、一緒に子どもと生活することに喜びを感じて、児童養護施設に就職しました。その後、結婚して退職、2人の娘の子育てに専念しました。自分の子育てに少し余裕ができて、施設勤務中から抱いてきた想いから、夫婦共に迷いなく自然な流れで養育家庭に登録しました。

現在は、多くの児童養護施設がより家庭に近い状態で生活ができるようにと工夫や努力をして環境づくりをしています。それでも大人数である以上はルールや決まりごとが多くなってしまいます。食事の時間、就寝の時間など一般家庭よりも厳しいと思われる部分があります。

何年もお世話をしてくれた職員が辞めてしまったり、兄弟同様に育ってきたお友達が家に帰ったりと、一番安定していなければならない生活の環境が変わることも多々あります。保育士になるために勉強中の実習生などが、短期間生活を共にすることもあります。子どもにとっては喜ぶよりも気を遣ったり、ストレスになることが多いのではないのでしょうか。施設で暮らすにはそうした環境に慣れていくしかありません。よく「施設の子は人なつっこい子が多い」などと言われますが、そうなる環境に置かれているからだ、と私は思っています。

養育家庭は、家族や地域の一員として子どもが馴染めれば、一番理想的な形だと思います。子ども時代に幸せな家庭生活を体験することが、その子の将来に重要な意味を持つと思います。

しかしその反面、すれ違いなど気持ちが通じ合えないとお互いの理解が困難になり、最悪の場合はその子と別れなければならず、養育家庭と子ども双方に深い傷を残すことにもなります。

虐待や養育環境によって精神的なサポートが必要といわれる子がふえる中、保育や子育ての知識に裏付けられた専門性と、複数でいろいろな目線から1人の子を見ることができる点は、逆に施設だからできることでしょう。1人の子どもについて、問題が起きれば話し合いをし、様々なアプローチを行えるのも施設だからこそ、と私は思っています。

2歳のMちゃんを預かったのは、私の娘が小学校1年生と2年生のときでした。Mちゃんは、数回の交流の後に乳児院から直接うちに来ました。実母と交流があり、月に数回乳児院からお母さんのところへ外泊していました。受託の段階から、自分のことができるようになる小学校就学前まで預かる予定と聞かされていました。

里親と聞くと、自分の子どもとして育てるイメージが強いかと思いますが、私たちの場合は最初から実親と一緒に育てていく感じでした。緊張や不安があった当初のMちゃんの表情はとても固く、おとなしい子でした。そのうち、だんだんと慣れてくると笑顔もふえてよく笑い、愛らしい表情を見せてくれるとても明るい子になりました。

うちにいる間もMちゃんと実のお母さんとの交流は続き、月に数回泊まりに行っていました。その際には、児童相談所で実のお母さんともお互いに顔を合わせて、体調のことや、うちにいる間にこんなことがありましたよ、これができるようになりましたよという話をしました。

我が家に問題が起きたときも、Mちゃんのお母さんにお伝えして、それでも私たちと一緒に居させてもらえるかとお話したこともありました。頼りない私たちに大事なMちゃんを預け

てくれたお母さんも、心配や不安があったと思います。今でも感謝の気持ちでいっぱいです。

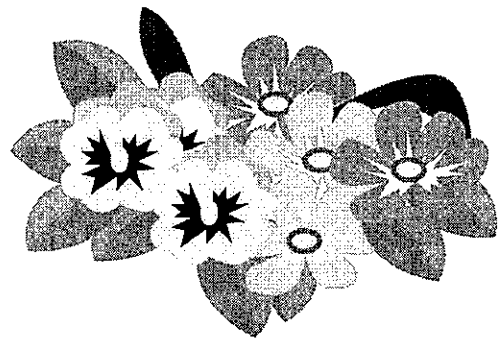
子どもと向き合うには、自分に精神的な余裕がないとできません。私も1日子どもたちと過ごし、時には自分のイライラをぶつけてしまうこともありました。そんな時に支えてくれたのが夫です。帰宅すると娘2人とMちゃんが走って玄関に出迎え、今日はこれがあった、あれがあったと我先に報告します。そんな時も夫は「まずはママの話を聞いてから」と私の話を真っ先に聞いてくれました。私が散々愚痴や子どもたちのちょっとした悪さを告げ口すると、夫は穏やかに諭すように子どもたちに話をし、子どもたちも私に素直に謝りに来てくれました。さらにその後は子どもたちの報告が延々と続くわけですから、夫も大変だったろうと思います。それでも、毎日ほとんどの時間を子どもと過ごす母親のサポートはやはり夫であり、父親としての大事な役目です。今でも、子どもたちが寝た後、子育てについて夫婦で話し合っています。

子どもを育てていると、悩みや苦労はあると思います。だからこそ、うれしいこと、楽しいことも実感できるのではないのでしょうか。それは、自分の子どもでも、施設の子も里子も同じです。

Mちゃんは、自分の名字で幼稚園に通い、私たちも周囲に隠すことなくオープンに里親であることを伝えてきましたので、近所の方に幼稚園の送迎をしてもらったり、用事のあるときに預かって遊んでもらったりと、助けていただくこともたくさんありました。私たちは、地域の方々にも助けられてMちゃんを一緒に育てていたと思っています。

Mちゃんは就学前に無事にお母さんのもとへ戻ることができました。無事に帰れて良かったという喜びが一番でしたが、やはり寂しさは大きくて、子どもたちの前では平静を装っていましたが、別れてから1カ月ぐらいはそっと泣いていました。

それから1年後、児童相談所を通してMちゃんから年賀状をもらいました。そこには、入学式でランドセルを背負ったMちゃんの写真がありました。見る事ができないと思っていたランドセル姿の幸せそうな笑顔に感情が一気にあふれて、声を出して泣いてしまいました。その年賀状は、今でも家のリビングに張ってあります。事あるごとに、元気かな、何をしているかな、と子どもや主人と話します。Mちゃんと一緒に暮らせて心から良かったと思っています。



## 13 最初の3ヶ月が肝心

### 【里母】

結婚当初、夫に35歳までに子どもができなかったら養子縁組をしたいと伝えました。主人はわかったと言い、39歳になってもやはり子どもができず、ついに養子縁組をすることを決意しましたが、日本における養育家庭、養子縁組をどこに話をしたらいいか、どこで受け入れてもらえるかが全くわからず、インターネットをあけても犬や猫の里親の話はいっぱい出てきても、養育家庭には全くたどりつかず困りました。

遠い親戚の養子縁組をしたカップルに会って話を聞きました。「実際どう?」「すごくよかったよ、まだ1年ぐらいしか預かっていないけれどもいいよ」彼らはファクス1枚で、タイ人の男の子を引き取りにいったのです。「どうして決めたの?」「そういう次元ではないというか、顔がどうか、性格がどうか、そういう問題ではなくなる」そういうもんなんだなと思って日本に帰国しました。

その2ヶ月後「2歳11カ月の男の子がいるんですが、短期で預かってみてはいかがですか」と聞かれました。長期を希望していたので短期の子を預かるというのはどういうことかなと考えましたが、短期でも何でもまずやってみようと思い決意しました。

そして面会し、3日後にはうちに来ました。最初に「何を食べたい?」と聞くと、「トマトを食べたい」と言うので、とりあえずトマトっぽい料理は一通り全部つくってトマトを出しました。おいしそうにパクパクと生のトマトを食べました。2ヶ月の予定がとっくに過ぎて、だんだん愛着がわき、お母さんのところにいつか返さなければいけないんだなと思ながら生活をしていくとだんだんつらくなり、この子どもがどうなっていくのか心配になりました。半年も過ぎたころに、このままでは多分子どもが戻ったときにすごく苦しい思いをすと思ったので、もう一人預かれたら預かりたいと希望しました。その2ヵ月後、6歳の女の子を長期前提で紹介されました。交流してもお宅まで会いにいきたがらないとか、お泊まりはとんでもないとか、夜尿があります、斜視があります、と言われ、私は斜視という言葉も夜尿も初めて聞いて、「何ですか、それっ?」聞き返しました。お恥ずかしい話ですが。そういう子どもですけれど、どうでしょうかと聞かれ、そう言われても自分の根本には子どもの顔を知っていようが知るまいが、性格がどんな子であろうがうちに連絡があった以上は、これは縁として考えるしかないもので、実際に交流を始めました。

1回目の交流は施設の近くで食事と散歩をし、「また会いたい?」「会いたい」「いつ会いたい?」「あした」「あさってだったら何とかかなと思うけど?」「いい」「じゃ、あさって来るけれども、実はうちにはもう一人子供がいて、弟になる子がいるんだけれども、それでもいい?」と聞いたら、えっ!と少し戸惑うような表情を示しました。何を戸惑っているのかと思ったのですが、彼女はすべての愛を独り占めしたいという希望があることがわかりました。それでも会いたいと言ってくれたので、後日というその日に今度は4人で会いました。食事をして、公園で散歩して、楽しく2時間ぐらい遊んで施設にお戻ししました。そしたら随分気に入ってくれたようで、すぐにまた交流したいということで3回目の面会の時にはうちに泊まり

にくると言ってくれました。そして初めての夜尿を体験し、施設での食生活、文化の違いをまざまざと覚えることになりました。結局3週間も経たないうちに受け入れることができました。実際に2人を預かり生活をしてはいますが、特に6歳の女の子を受け入れて、施設の中でしみついたことが一番私には大変で、私がつくる御飯を片っ端から食べては首をかしげて「まずい」と言い、かちんとくことばかりやられました。それと3歳の男の子の上に6歳の女の子が来たので、女の子には十分甘えさせてあげることができませんでした。どうしても下の子に手がかかるので上の女の子が随分我慢をしてかわいそうな思いもさせました。赤ちゃん返りもたくさんしました。その中で一番印象に残っているのが、自分で擬似誕生日会を行ったことです。迎えて、最初は体を自分で小さくして、赤ちゃん言葉や泣き声で1歳の誕生日をやり、ロウソクをつけて吹き消して2歳、3歳、4歳、5歳と一通りやっていました。おっぱいを飲んでみたり、いろいろな時期にいろいろなことを行ない、こうして1年がたちました。

最後に、預かってからの3カ月間にやっておいたほうが良いと思うことが実はあります。それは、子どもは自分の一番いいところを見せます。たとえばよくお手伝いをしてくれたり、勉強をして見せたり、その良い癖たちを一日でも長く続けさせてあげることで、心機一転今までのよかった生活習慣を伸ばしてあげたいということ。また、逆の意味で悪い癖や、家族とやり方は全く合わないというものがあるときは、徹底的に自分たちのやり方を最初にたたき込みました。それがいいかどうか私にはわかりません。今はやっぱりよかったなと思っています。その3カ月間で自分たちがいかにすり合わせできるかによって、その後がすごく楽になったような気がしました。だから、最初の3カ月間を大切にしてほしいなと思います。

